展勝地風土記 Vol.20
平成29年4月28日
展勝地開園100周年記念事業準備委員会
問い合わせ／北上市都市整備部都市計画課☎72－8279

展勝地開園100周年記念事業準備委員会で、100周年に向けた取り組みとして、より多くの市民に展勝地を知っていただくため、展勝地に関するさまざまな情報を紹介しています。歴史的なこと、地理的なこと、自然環境のこと、そして、展勝地に深く関わった人々や展勝地を題材にした美術・文芸作品などについて紹介していきます。次回は7月28日に発行します。

自然、芸術、そして旧暦

NPO法人芸術工房　理事長　新田　満

自然に勝る芸術はない

西和賀町から北上市へ移り住んでからはや6年、私の朝は窓のカーテンを開け、北上川と展勝地の桜並木や山並みを眺めることから始まる。時には陣ケ丘の岩頭に立ち、遠く西山を見ては我が故郷に想いをはせる。心にゆとりを失いイライラすると「みちのく民俗村」へと向かい深呼吸する。不思議なことにす～っと何かが体から抜け出し、気持ちを切り替えることができる。私にとってこの場所はパワースポットであり、人々の心を癒すために作られた芸術作品だと思えてならない。

もともと人間は自然とともに生きてきた。私のライフワークになっている演劇の世界では知る人ぞ知るロシアの演出家スタニスラフスキーは「人間は自分自身で創造する能力はない。唯一天才的な芸術家、それは自然である」と言っている。嘘、わざとらしさ、紋切り型、そしてどぎつさは、決して創造を生み出さない。現代演劇は文明が発達するに従い、より完成された照明や音響機器に頼りすぎ、芸術性が薄れ表面的なものに支配されていることに気づく。感覚は発展させることはできるが、感性というものは育てるもの。感性を育てるには「心」が関わってくる。感性豊かな人は頭で考えるだけでなく、心に浮かんだことを素直に表現できる。人間の感性が鈍くなったのは自然から遠ざかっていったのが原因かもしれない。自然に勝る芸術はない。

展勝地で自然と芸術の融合を試みた出来事があった。1997年8月、実行委員として企画に参画した観世流の薪能公演は今でも鮮やかに目に浮かぶ。北上川のほとりに造った特設舞台で舞う「安達ケ原」の演者と奥羽山脈に沈む夕陽の背景は見事に自然と調和していた。

旧暦行事で楽しむ「みちのく民俗村」

展勝地の一角「みちのく民俗村」は自然、文化、歴史など多様な観光資源を有する。また、せわしない日々の生活に、時間を気にせず過ごせる癒しの空間でもある。この魅力的な自然環境を生かした観光振興は、「自然を求めるのは人間の本能だ」と

北上川入り江特設舞台で行われた「展勝地薪能」

いう自然の法則に沿った計画を希望する。人を多く集めることを目的にした従来のイベント型観光にとらわれず、どうしたら日常的に人が集まり、再び訪れたい地となるかを模索する必要がある。

「みちのく民俗村」では旧暦で実施する年中行事を検討しているという。日本人は古代から明治5年まで月の満ち欠けを基準にして生活や自然と密接に関わってきた。まさに自然の法則に合っている。人は旧暦に合わせて季節に寄り添いながら暮らしてきたからだ。先人の知恵を知ることは、今の世界が失いつつある本当の豊かさを見つけられるヒントが隠されているような気がする。

宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」に想いをはせる。月明かりの下で、無駄な動きをすることもなくできる朗読劇は、観ている人たちの創造力を高める。自然あふれる環境の中でできる芸術はたくさんあるはず、大きな幸せを求めず、ささやかに本当の幸いを感じるのも楽しいではないか。

筆者プロフィル

新田　満

1948年湯田町(現西和賀町)生まれ。
西和賀町役場退職後、北上市へ移住し舞台芸術コーディネーターとして活動。
現在、特定非営利活動法人"芸術工房"理事長、北上市文化創造(さくらホール)評議委員、劇団前進座(東京)アドバイザー、東京ノーヴィ・レパートリーシアター(東京)アドバイザー、シアターネットかんげき(北海道)顧問、日本・ウラジオストク協会理事(東北支部長)、日本演出者協会会員。